

もっと知りたい
ふるさと

II

須須岐水神社

安永一〇年(一七八二)における当社所有の文書に、竹田刑部亮神主・村山次左衛門などの七人の連署で、松代藩への提出文書に、当社は信州埴科郡総産土神の総社にて、古来における勧請年月は不明に御座候得ども、往古の勧請にて須須岐水神社の日吉山王宮、また、波布離山王宮とも称し奉っていた。



奈良時代直前に推古天皇の白鳳(当年号は通常の書には未記載書もある)期では、当地において「祝神社」が設置されている。然るに天明元年(一八七一)には、松代町の神官が松代藩を背景に、祝神社の称を当地に譲渡を要請し、やむなく屋代はこの要請に屈した。

寛保二年(一七四二)に戊の満水が起きて、当地の灌漑水路がずたずたにされたので、新しい用水路の設定が模索され、千曲川の十夜河原を揚水口とした「屋代用水(堰)」の設定が生まれた。当用水は広範囲の耕地を潤した。具体的堰流には、松代領では上徳間・内川・千本柳・中(後の小船山村を含む)・粟佐・屋代・雨宮・森・倉科・生萱・土口の一村、幕府領では寂蒔・鋳物師屋・打沢・桜堂・小島・杭瀬下・新田の七村に及び、両者の総計一八村に灌漑水の提供、現須須岐水神社は当地区の水神の地位を確立した。

は善光寺平の南部用水堰として、重要な耕作上の役割の任務を担ったのであった。神輿は平安時代の前の貞観五年(八六三)には奉納されていたと伝承があるほどの古い時代に生成した歴史的な神輿であった。神輿の重量は三百貫もあったといわれるが、この重い神輿をかついで、ともかく雨宮の唐崎社まで明治前に往復した。神輿は「わっしょい、わっしょい」ではなく、「ゆいとう、ゆいとう」の掛声であった。これは重い神輿で走った当時の「唯遠、唯遠」の名残りからきた掛声と思う。

「一つ物」は古代の屋代領主の代行者の、当社への参詣行事であった。これには武者行列が伴って独特の屋代の風情をかもしている。近年道路の拡幅にともない玉垣が改修され、その後新拜殿建設を中心とする境内整備工事が実施された。この工事は寄付金四、六四七万円に基金三、一九四万円を加えて七、八四一円で執行され、平成十九年四月二十九日完成竣工式が挙行された。当社の祭りには定例の春秋の例大祭や、七月三十一日の茅の輪祭りも夏の風物詩として定着している。



一つ物 (昭和30年)

屋代 中島 正利